

第 7 章

わたしが英英辞典トラウマを 脱するまで（上）

■ *Introduction*

いまでも、英英辞典べったりのわたしですが、じつは英英辞典を本格的に使うまで何度も挫折がありました。

そんなわたしを笑ってやってください。

そして、なにか教訓をくみ取っていただけると嬉しいです。

英英辞典ほどオトクなものはない

英英辞典派のわたしですが、身近に英和辞典も備えてあります。わたしが英和辞典を使うのはこんなときです。

- (1) 植物や動物の和名、医学関係などの専門用語の正しい和訳を知りたいとき。
- (2) 英文をガチで和訳していて、きれいな日本語文に仕上げたいのに適当な日本語の単語が思い浮かばないとき。(例えば、第1章 p.024 で引用した *the activity of providing goods and services* の *activity* は「活動」ではシッカリこないなあと悩んでしまい、英和辞典を見たら「行為」という訳語も出ていて、これにとびついた)
- (3) 英英辞典を読んで、いまひとつピンとこないときの「駆け込み寺」として。

英和辞典を使ったほうが、はるかにラクなはずなのに、英英辞典に固執するとはよほどの偏屈もの？あるいは受験者よろしく、あえて苦勞を求めているのか。

つきつめて言えば、わたしが英英辞典を使うのは「ケチ」だから。「辞書をひく時間を100%有効に使いたい」という思いが意識の底にあるからでしょう。

ひとつの単語をひいたときに得られるもの。英和辞典をひいて得られるものと、英英辞典をひいて得られるものを比べたら、**英英辞典をひくときのほうが得られるものは圧倒的に多い**。この「オトク」感に魅せられてしまったわけです。

例えば *bee* という単語をひくとしましょうか。

スマホでも電子辞書でも紙の辞書でもいいですが、「英和」で *bee* をひけば「ミツバチ」というカタカナ4文字でおしまい。

これが、「英英」ならば

bee: a yellow-and-black striped flying insect that makes a sweet food (=honey) and can sting you || *Bees buzzed in the flowers.* (Collins COBUILD Primary Learner's Dictionary)

(黄色と黒がまじった、シマ模様の、飛ぶ昆虫。甘い食物(=ハチミツ)をもたらし、刺すこともある || ミツバチがぶんぶんの花々に群がった)

「ミツバチ」の4文字だけパッと見るのに比べれば、15ワードの語釈と5ワードの例文を読むのに時間はかかる。でも、**得られるものも大きい**。

striped 「しま模様の、しましまの」。読めばわかるけど自分で使ったことのない単語。*a striped shirt* は「しましまのシャツ」、*a striped fish* なら「しま模様の魚」だ。使いでがありそうです。

sting 「刺す」。これまた、知ってはいても自分で使ったことのない単語。

犬や蚊が *bite* する(=噛む)英文は、中学の英語教科書以来、やたらと目にしたし、英作文ネタでも盛んに出てきた。ところが、ハチが *sting* する英文には、あまり出会った記憶がありません。

sting を英英でひいてみましょうか。

sting: if a plant, an animal or an insect stings you, a pointed part of it is pushed into your skin so that you feel a sharp pain || *She was stung by a bee.* (Collins COBUILD Primary Learner's Dictionary)

(植物、動物ないし昆虫が *sting* すると、その尖(と)った部分が皮膚に押し込まれて鋭い痛みを感じる || 彼女はミツバチに刺された)

この sting の語釈に you や your が出てきますが、この you/your は、辞書の使用者たる「あなた」を指しているわけではなく、「ごくごく一般的なくひと」を指しています。「わたしとあなた」の二人称ではなく、「**一般人称**」の you と呼んだりします。日本語ではわざわざ言い立てないので、上の訳文でも you/your にあたる訳語はありません。

横道にそれました。英英辞典の bee に戻りましょう。

例文の Bées búzzed in the flówers. この buzz も、知っているけれど自分で使ったことのない単語です。

buzz: to màke a sòund like a bée || *There was a flý búzzing around my héad.* (Collins COBUILD Primary Learner's Dictionary)

(ミツバチのような音をたてる || わたしの頭のまわりでミツバチのような音をたてるハエがいた)

Bées búzzed in the flówers. という文の buzz の意味を調べて buzz をひいたら「ミツバチのような音をたてる」という語釈で bee に戻されてしまった。ちょっと残念。別の英英を見てみましょう。

buzz: to màke a lòw stèady nóise like the sòund that a bée màkes || *The machine màde a lòud búzzing nóise.* (Longman Basic English Dictionary)

(ミツバチがたてる音のような、低い持続的なノイズをだす || 機械は耳ざわりな低い持続音を出した[機械はブンブンうるさい音をたてた])

a lòw stèady nóise という表現も使いできそうです。例えば

Làst níght I was vèry annóyed by the lòw stèady nóise of a mosquito.

(昨夜は蚊が1匹ずつと低い音をたてて、えらい迷惑だった)。

英和辞典で bee の訳語をチョロッと見るだけより、英英辞典のページに迷い込むほうが、思わぬ収穫がありそう。これにハマって英英辞典の魅力から抜け出せなくなるわけです。

英英辞典との出会いは失敗の連続だった

しかしじつを言えば、わたしの英英辞典との出会いは失敗の連続でした。

高校1年生のとき『新英英辞典』(研究社)をワクワクしながら買ったのが、英英辞典の使い始めでした。ところが、この辞書は致命的欠陥(後述)があり、けっきょくわたしは当時使いなれた『新英和中辞典』に戻ってしまいました。

地方から東京に出てきて大学に入ると、今度こそは洋書の英英で勝負だ!と、はりきりました。勇んで日本橋の丸善本店に参上して買ったのが Merriam-Webster's Collegiate Dictionary でした。collegiate (=大学生向けの) とあるから、大学1年生の自分向きに違いないと考えたのが浅はかでした。

日本ではなく米国の辞書が collegiate というからには、「米国人ネイティブの大学生向け」ということ。しかも Collegiate を銘打ったこの辞書の初版が出たのは120年以上も昔の1898年であり、当時の college students といえば社会のエリート集団です。当時の米国人のうち、大学教育を受けた人は人口の2.5%どまりでした。そのエリート集団向け、トップレベルのネイティブ向けの辞書なのです。